

## 将来の防災リーダーの育成について ～未来を守るのは私達！ 大和市少年消防団！！～



神奈川県 大和市消防本部予防課  
予防係 主査 野畑 和宏

### 1 はじめに

大和市少年消防団は、神奈川県大和市内在住の小学4年生から6年生を対象として、団員43名を擁し平成5年に発足しました。平成29年度には対象を中学3年生まで拡大し、現在の団員総数は211名となっております。

活動内容は、規律訓練をはじめ、消火訓練、通報訓練など火災予防に関する知識・技術を学ぶほか、救命講習、三角巾取扱訓練、結索訓練など人命救助の技術



令和元年度大和市少年消防団員集合写真



三角巾取扱訓練の様子

習得にも努めています。

また、宿泊研修、視察研修等の野外研修を通じて共助の精神を養い、さらには避難所体験訓練の実施やジュニア防災検定の受検など、防災活動に繋がる実践的な活動も行っています。

卒団生は延べ1,600名に達していますが、その多くは学業や職業と両立しながら指導員として団員を導いており、いわゆる屋根瓦方式により防災・減災に関わる知識・技術の伝承が行われています。このような中、これまでに2名の指導員が、長きにわたる団員指導の功績を評価され、「優良な少年消防クラブ指導者（総務大臣賞）」を受賞しています。今後も卒団生には各地域・各職域における防災リーダーとしてのさらなる活躍を期待するところです。

### 2 災害イメージネーション

将来の防災リーダーを育成するため、訓練を実施する際には、いかに災害を「自分に降りかかったものとして捉えることができるか。」に着目して行っております。平成30年に発生した西日本豪雨や、令和元年9月、10月に東日本を立て続けに襲った台風第15号、第19号による甚大な被害は記憶に新しいところですが、これまでは数十年に一度発生していた規模の災害が毎年発生しているほか、首都

圏直下型の地震が30年以内に70%の確率で発生すると予測される中、団員には、災害が自分に降りかかったものと想像させる力、「災害イメージーション」を養わせる必要性を感じています。「自分はきっと大丈夫。」と災害を過小評価した結果、避難行動が遅れて被災する事例がたびたび問題となっていますが、団員への指導の成果は、このような「正常性バイアス」をいかに取り払えるかが鍵を握ると思います。そのため、当団では団員達に市街地を見分させて、その後、災害時に起こりえる危険事象をグループで検討させてみたり、消防署で模擬避難所生活を体験させ、より良い避難所のあり方の検討をさせてみたりと、自分と災害とを結びつけて想像する訓練を積み重ねています。



避難所体験訓練の様子

### 3 多様性について

今年度、当団は過去最大の団員数をもって活動を行っております。結成から25年以上が経過し、OB・OGとして活動に参加している高校生から社会人の指導員は、自分達が在団していた当時の少年消防団像との世代間ギャップや、団員数が増員したことによる活動の困難感などを

感じつつ、試行錯誤を重ねて指導にあたっています。一人ひとりの団員、指導員が育ってきた環境や感性は様々であるがゆえに、団員同士、指導員同士のあつれきも少なからず発生しますが、そのようなとき、子供達には「救助者たる心得」を伝えています。例えば、性別、年齢、身体、財産、国籍、文化、思想・信条など、挙げればきりが無いほど人間個々には違いがあり、そんな多様な人々が暮らす社会に対し、災害は一切の選別なく降りかかります。そのとき、救助者たる者が、助けを求める者を選別するなどありえず、つまりは日頃から人間個々の違いを受け容れ、万人に手を差し伸べられる存在であってほしい、というメッセージです。



高校生の指導員から結索を教えてもらう小学生団員

### 4 おわりに

今後も、社会の多様化や高齢化が進むなか、激甚化する災害への対応策も複雑性を増すことが予測されますが、子供達にはその豊かな想像力と受容性を駆使した発想で、災害に強い街、持続可能な社会を創り上げる防災リーダーとなることを期待します。